官西洋秘法評

傳授所

毎日從午前十時至午後三時

日曜日休課

修身一端

轉ぬ茣蓙の杖

東京 木村正五郎 板

定價 三錢五厘

東京書籍館蔵記

A796

修身一端転ぬ前の秋

東京　木邨正五郎戯著

遠き慮り無きときは則近き患ひ忽ちに実ふ
宜なる哉古人は金言といふ為しきもの今誰人
も将小事を為さんとも忽ち豫て先其利害得失
を慮り而して後ち為せば大なる過ちを
うるべし夫物は本と末とあり是樹の譬ハ
根は本なり枝葉は末なり其根を截ずして枝葉を

一　茅一　長寿なる傳
一　茅二　金持なる傳
一　茅三　藝術の上達
一　茅四　智者なる傳
一　茅五　火事は出さぬ傳
一　茅六　水に溺れぬ傳
一　茅七　大海を渡る傳
一　茅八　盗賊の難を逃る傳
一　茅九　神仏は罰を蒙らざる傳
一　茅十　生涯安樂に暮る傳

右之外追々傳授可申候也
来偖謝儀等聊不申受候

48-7697

忽ち枯る又根より培はゞ枝葉従て榮ふ何事も皆此ゆうきりにしたがれば爰より遠慮なく云も轉んで
ハきりぬゝへより其前うら扶つゝ是其本より註
意をふる所以なり或人の言より予頃日萬國新聞を
聞るに前代未聞の珍事なりとて話ききしハ今
を去る事七十余年前西洋紀元一千八百年間に
頃歐羅巴有名の都府トオルニヨ住せしグレート
ワイズメン人名大賢人なり其人乃著ゞ
ウィズオフメンと題せる一巻の秘書あり先頃横

港より舶来せしに由りて或博識の先生これ翻譯し
有志の人〳〵へ秘法を傳授せんとて
官に告げ許可を得て近日開業せんと其秘法
社件〳〵ハ既に扉に看板を張出し高覧に供へ候
へバ爰に省く然るに月日ハ矢よりも疾くして
官許に有しきん彼の十ケ條の傳授大きなる額
に麗〳〵と大筆に書記し門に掛今日開業社當日
と有志の人ハ殊更に往来の人も足を留め其雑

沓大方たゞ門前ふ市ゝ為ゝゝゝ実ゝ此支東
らん内ハ数員の門弟と覚しき人〻ゝ席を列ね
備て玄関ゝゝ倚子腰掛数脚ゝゝ座中央ゝ書
几を据て両三人洋服着して並び居るハ書記取
次の面〻ゝゝゝゝゝゝ定刻ゝ報ぜれば玄関ふ
待居る人〻ゝ名書札の前へ呼出し其姓名と住所
ゝ問ひ書記員帳ゝ記せゝゝ第一大区何小区何
町何丁目何番地弱井究蔵則第一号の札ゝ渡し
次ゝ腰掛ふ扣へきゝ次も又第一大区何小区

何町住居茨川愍兵衛二号の札を請取て是も同
ゝく扣へゝゝ第三号ハ簿木思案第四号ハ鉈田
迂左衛門夫ゝ五号六号と續て来る人〻ハ作
者も一ゝ姓名と住所を枚挙ゝ違ゝゝゝゝゝ是ハ書
記員の職掌ゝれゝ彼の帳面ゝゝ記しゝゝ程ゝ
く告ふ午前ゝ十時是ゝ合図ゝ奥の間ゝゝ襖を
明て呼挙る第一号弱井究蔵とゝゝれハ究蔵
慎〻衣紋ゝゝを〻奥の襖を明て入り遥ゝ向ふ
と見渡せバ堂〻ゝる廣間ゝ數脚の倚子を併べ

正面なる先生書卓に擘城ける床を脊にして意氣揚々と坐り左右に侍きれる數員の門弟席に正しく扣へたり是へ〳〵と云声に究藏進で前に倚子に かゝり敬て拜禮す先生曰御身は如何なる傳授の望ありと問に究藏答へて曰私は幼年の頃より至て壯健にあれども中年より風と病とに悩み医療も致しけれども良藥も口に苦しのみとへて何分藥が甘くなりて口に合ひませんと止どしはれ加治や祈

待を精出しそれ〳〵或ハ卜者に吉凶抔見て貰ひまして何分長寿の程も非難く存今日先生に御傳授抔受長命致度存ずまゝ宜しく御願申ますと云先生曰明日例刻に来るべし其節秘法を傳ふべし帰されける第二号渋川慾兵衛進て先生に拜礼を先生曰御辺は何の傳授を望てかゝる慾兵衛声抔低くして云私も元来慾兵衛と申程にて貪欲もびの字でも嫌ひで至て慾に深く只金のほしいばかり病ひで

家業ゝもかすかなれば何らかき金の出来る事ハなきうと日と考て居りすれが何分よもすれハ工夫も出ず如何致そうと思案も尽殆ど当惑の折柄先生が御傳授下さると云事を聞きしたゆへ不取敢推参仕りまして御禮ハ何程でも差上ぱきうらどうぞ金持みるゝやうと御願申上ると云先生曰明日例刻ハ来れ傳授致さとて帰されける茅三号ハ年齢二十を超る事一二才と覚しき散髪よて黒の五ツ所紋付羽織を着し頭ゝ鼠色を

被帽子を頂き蝙蝠傘を扶みはき自若として加へしが順号の来るゝ因て則先生ゝ謁しく云僕儀ハ當都下ゝ寄留せふ薄才思案をもとして慇懃ゝ禮義ゝ述べ又曰父ゝ医道ゝ以て某候の典藥たりしが一昨年中病ゝかゝり遂ゝ相果まして其後母と倶ゝ御當地へ参り亡父の遺業を嗣度志願ゝて家業ゝ成ハ一ちゝ未熟故ゝ治療をも仕藥ゝ求むる者一人もなくて甚ゝ困究致しまして何卒右の事情御賢

鉞田甚左衛門
薄井思案
渋川欽兵衛
僻田頑児後より来る姿見図

規則
月　日
先生
弱井究瀬
門人

察成下されば速に業の上達するやうに御傳授願
わしと云先生曰諾明日例刻に御来車有べし我
法我傳へ申さんとて帰しぬ弟四号ハ鈍田迂左
衛門進て先生に謁し法に如く禮畢りて曰下拙
儀も元某候に臣當時何縣乃貫属ふて是迄ハ先
祖の功ありて世録を以て妻子を養ひしが先頃中
家録奉還の事御出されて何ゝ見込ありて
方向を定むべき存ぜれとも素高に業
をしらべ且旧武家乃風として只門閥に跨り物

を學び習ふと云事ハ夜初より致し先事なく今
更悔やまれども早年五十に成られば其甲斐なし
併しながら幸ひに八才の男子と六才の女子あ
宜願くハ先生の妙法を以て彼等両人を智者に
し其出精を見て老の楽とせんと存ぜん因て
御傳授の程伏て願ふと云先生曰御尤なり然
ハ明日例刻に御出なるべしと時に又報ぜ休
憩乃号カチ〳〵と鳴ふ暫く休息なして又て順号
に傳授を願を述て各歸宅せりとなり備其翌日

も早朝より遠近の人て馬車或ハ人力車にて傳授ひ受んと来る人其數ひ知ず又一人門前に足を留め掲る看板つくづくと思ふに今開明の古の時にかゝる不審の事ハ西洋秘法といふかゝ所謂彼此耶蘇なるべし妖術にて愚民ひ誑ひ利を貪る此手術なん悪き此奴其偽計を認め論破せんかと心中に深く憎ミ怒りひ含む玄関に至り姓名ひ通じ先生に謁せん事ひ乞ふ則書記貞解田頑児と姓名を帳面に記し号札を渡し扣へさせ猶ほ怒り止さまざまに未だ順号の来らぬハ古和是非なき次第なり然る處へ前日に傳授を願ひし人々ハ各秘書ひ授りてこれを見る小上書

轉ぬ前に扶

と云り則是を披き見るに

第一号長命の傳養生べし服藥べ運動ひ欠く可からず

第二号金持ハ傳正直に有るべし節儉べし朝起べ家業ひ出情べし

第三号藝術の上達べ傳勉強べ怠る勿れ

第四号智者に

たる傳幼少より教ゆるを幼年より教ゆる外傳と
を外母深切なる教へなりしを父の
怠り擧らぬハ子の罪右ハ皆各御存生共尚大
切小御心得あるべし予ゞ傳る秘法斯の如しと
ゆるゝ皆〻顔を見合せ如何ある秘傳の有んう
と思ひの外の事なるべ皆耻入て紅の色玄面ま
顯一つ只あるゝと去よりける
第二号近〻出版仕り御最寄の書林繪
双紙見世なとにて御求め可被下候

亢亭服部應賀新著作表題

當世利口娘 二号近刻	智恵の秤 三号	新製兎美断語	天上大珎事	金庫三代記 全三冊	驕人ぶつ〻ぎ	東京花毛抜 五冊
虫類大議論上下	權兵衛種蒔論	同二号 大郎兵衛水掛論	同三号 孫兵衛活計論	市の虎狩	二ヤアチウ談	畑水練
日本女教師	洋学古切雀	近世ひきれ墓	放言深山鳥	みそかな男	和談三才圖笑 全冊	豊年五穀祭 三

青樓半仕通 全三冊
轉ぬ前の杖
大鉈託新文鬼談 三

010190525290

小說社中發兌書林

東京

小傳馬町三丁目　山嵜屋清七
大傳馬町三丁目　九屋正五郎
神田須田町　高木和助
神田通新石町　紀伊國屋德藏
人形町通新乘物町　上州屋重藏
濱町三丁目五番地　星野松藏
東兩國元町五番地　鈴木勘二郎
大門通　浪花町　鶴屋喜右衛門